

件 名

令和5年度体罰等の実態把握の結果について

提出理由

体罰等の実態把握のため、令和5年度中の体罰等の発生状況（体罰等の有無、態様等）について調査したので、その結果を別紙のとおり報告します。

概 要

1 調査の趣旨

児童生徒に対する体罰等の実態を把握し、体罰等禁止の徹底を図り、信頼関係に立つ教育の推進に資する。

2 調査内容

令和5年度中の体罰等発生状況（体罰等の有無、態様等）

3 調査対象期間

令和5年4月1日～令和6年3月31日

4 調査対象

県内全公立小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校（さいたま市立学校を除く。）

（市町村立） 小学校 693校、中学校 353校、義務教育学校 2校、
高等学校 2校、特別支援学校 2校

（県立） 中学校 1校、高等学校 137校、特別支援学校 38校

5 調査方法

各校で児童生徒、保護者、教職員へのアンケート調査や聴き取り等を実施

6 調査結果の概要

（1）発生件数 計 13件

小学校 1件、中学校 0件、高等学校 9件、特別支援学校 3件

（小学校は義務教育学校の前期課程を、中学校は義務教育学校の後期課程を含む。以下同じ。）

(2) 主な場面

部活動 5 件、授業中 4 件、休み時間 3 件、放課後 1 件

(3) 主な態様

素手でたたく 9 件、身体を強く押す 2 件、胸ぐらをつかむ 1 件、
その他 1 件

(4) 主な被害

負傷なし 8 件、精神的苦痛 4 件、打撲 1 件

7 県教育委員会等の対応

懲戒処分 0 件

訓告等 12 件

表1 令和5年度に発生した体罰等

概 要	小	中	高	特	計
発生件数	1 (4)	0 (8)	9 (4)	3 (0)	13 (16)
発生学校数	1 (4)	0 (5)	7 (4)	3 (0)	11 (13)
体罰等を行った職員数	1 (4)	0 (5)	7 (4)	3 (0)	11 (13)
被害児童生徒数	1 (4)	0 (13)	10 (6)	3 (0)	14 (23)

()内は令和4年度

表2 主な場面

	小	中	高	特	計
授業中			2	2	4
放課後			1		1
休み時間	1		1	1	3
給食時					0
清掃時					0
部活動			5		5
ホームルーム					0
学校行事					0
その他					0
計	1	0	9	3	13

表3 主な場所

	小	中	高	特	計
教室			1		1
特別教室	1		1	1	3
職員室					0
運動場・体育館			4		4
生徒指導室・相談室					0
廊下・階段			3		3
実習室					0
その他				2	2
計	1	0	9	3	13

表4 主な態様

	小	中	高	特	計
素手でたたく			7	2	9
棒などの道具を用いてたたく					0
蹴る					0
投げる・転倒させる					0
胸ぐらをつかむ			1		1
身体を強く押す	1		1		2
ものを投げつける					0
暴言・威嚇					0
正座をさせる					0
その他				1	1
計	1	0	9	3	13

表5 主な被害

	小	中	高	特	計
死亡					0
骨折					0
捻挫					0
鼓膜損傷					0
外傷					0
打撲			1		1
鼻血					0
髪を切られる					0
精神的苦痛			3	1	4
負傷なし	1		5	2	8
その他					0
計	1	0	9	3	13

表6 把握のきっかけ（複数可）

	小	中	高	特	計
児童生徒の訴え			4		4
保護者の訴え	1		4	1	6
教員の申告	1		4	3	8
第三者の通報					0
その他					0

表7 把握の方法*（複数可）

	小	中	高	特	計
当事者教員	1		9	3	13
その他教員			8	3	11
被害児童生徒	1		9	1	11
その他児童生徒	1		4		5
保護者	1		2		3
その他（第三者）					0

* 事実関係の把握の手法のことであり、体罰事案把握のための事情聴取対象者を指す。

県教育委員会等の対応

表 8 処分等（当事者）

	小	中	高	特	計
免職					0
停職					0
減給					0
戒告					0
（訓告等）	1		7	3	11
計	1		7	3	11

表 9 処分等（監督者）

	小	中	高	特	計
免職					0
停職					0
減給					0
戒告					0
（訓告等）	1				1
計	1	0	0	0	1

懲戒処分（免職、停職、減給、戒告）は、任命権者（県教育委員会）が行う。
 訓告等は、服務監督権者（県立学校教員の場合は県教育委員会、市町村立学校教員の場合は当該市町村の教育委員会）が行う。

表 1 0 体罰等を起こした教員の年齢構成

年代	小	中	高	特	計
20歳代	0	0	0	0	0
30歳代	1	0	1	0	2
40歳代	0	0	5	1	6
50歳代	0	0	1	1	2
60歳代	0	0	0	1	1
計	1	0	7	3	11

表 1 1 体罰等発生件数の推移（過去 5 年）

年度	小	中	高	特	計
令和元年度	0	10	22	3	35
令和 2 年度	1	2	6	1	10
令和 3 年度	1	3	12	2	18
令和 4 年度	4	8	4	0	16
令和 5 年度	1	0	9	3	13

調査結果を踏まえた今後の対応策

1 調査から分かったこと

- ・感情のコントロールや、従来の指導観から転換ができておらず、体罰以外の指導方法を選ぶことができていない。
- ・特別支援学校では、障害のある児童生徒の指導を一人で抱えてしまい、組織的な対応ができていない。
- ・高校では、部活動において、体罰が発生している。

2 課題

- ・体罰につながる自分の考え方の癖や認知の歪みを認識し、人権意識を高め体罰によらない指導力を身に付けさせる必要がある。
- ・児童生徒の障害特性を踏まえた組織的な体制を整える必要がある。
- ・生徒主体の部活動への転換、部活動指導に係る研究結果や数値などの科学的根拠に基づく指導への転換が必要である。

3 対応策

- ・令和6年6月に更新した「不祥事防止研修プログラム」の「不祥事防止のための心理と行動のワークシート 体罰」を活用した研修を実施し、改めて体罰によらない指導の自己認識を高める。なお、小中学校等においては、市町村教育委員会と連携して体罰の防止を図っていく。
- ・特別支援学校向けにリーフレットを作成し研修等で活用することで、児童生徒の「気になる行動」が、「いつ、どこで、誰といる時、何をしている時」に起こるのかを教員間で共有し、児童生徒の指導に困難な状況が生じた場合、別の場所へ退避させ落ち着くよう促すことや安心できる人が支援するなど、組織で対応できる体制を整える。
- ・部活動における体罰防止に向け、高体連等とも連携し、ティーチングやコーチングの違いの理解による適切な使い分け、外発的動機付けから内発的動機付けへの転換など、体罰によらない指導の工夫を周知するリーフレットを作成し、体罰防止に向けた指導力向上の意識を高めていく。

不祥事防止のための
心理と行動のワークシート

体罰

[様式a]相手への制裁・報復を
目的とする行為編

このワークシートは、平成 30 年度以降、実際に起きた埼玉県の実例から「体罰のうち行為の目的を相手への制裁・報復とするもの」に該当する複数の事例を抽出して共通する出来事や事故者の心理状態など*1を分析し、認知行動療法の考え方*2を取り入れて作成したものです。不祥事を起こすに至るまでには、行動に先立つ思考過程のパターンがあります。ワークシートを使って自分をモニタリングしてみましょう。

*1 掲載に当たっては実際の事例を参考に、改変を加えている。

*2 問題のある行動につながる考え方の癖、いわゆる認知の歪みを認識して、適切な考え方・行動へ向かわせる手法

出来事		不祥事へ向かわせる 心の声	不祥事を思いとどまらせる 心の声
日常の段階から、不祥事の発生、発覚に至るまでの経過を自分事としてたどってみましょう。		出来事に対応する心理としてあなたの思いに近い方の□にチェックを入れ、更に思い浮かべることがあれば()の中に記入しましょう。	
日常	手のかかる生徒の一人。保護者から相談を受けることも多い。	<input type="checkbox"/> 生徒と本気で向き合い、自分の方法で良い方向へ変えていきたい。()	<input type="checkbox"/> 校内で一貫した方針で対応していくことは大切。()
指導方針への不満	問題行動がある度に周りの教員が生徒に注意しているが一向に改善しない。	<input type="checkbox"/> 困っている教員は多い。このままのやり方では良くなる。()	<input type="checkbox"/> どうやって改善していくべきか、改めて教員同士で考えよう。()
個別の指導	生徒の問題行動があった。多目的室に呼び出し、自分一人で指導を始めた。	<input type="checkbox"/> 自分の言うことは素直に聞くことが多い。自分が引き受けよう。()	<input type="checkbox"/> 自分だけでは間違った判断をするかも。()
印象付け	威圧的に怒鳴る指導を行った。	<input type="checkbox"/> あえて厳しさを見せることが必要な機会だ。怖さが無いと変えられない。()	<input type="checkbox"/> 毅然とした態度と威圧的な態度。分けられているだろうか。()
相手の態度の確認	生徒は反省の言葉を口にしたが、その態度にはふてくされるような気持ちが溢れていた。	<input type="checkbox"/> 思いがまるで伝わらない。真に反省していないことに苛立つ。()	<input type="checkbox"/> 冷静に！相手がどんな反応でもまずは落ち着いて受け止めよう。()
音で威嚇	傍にあった机を蹴り、壁を叩いて大きな音を出して生徒を威嚇した。	<input type="checkbox"/> 反抗的な態度を取ったらどうなるか教える必要がある。()	<input type="checkbox"/> 怒りのピークは6秒。6秒待って一旦離れて対処法を考えよう。()
身体に接触	生徒の胸元を押し、壁際に追いやった。	<input type="checkbox"/> 時には徹底的に体当たりで向き合うことが大事。()	<input type="checkbox"/> 向き合う指導は対話でできるはず。()
強い攻撃	驚くような表情を見せた生徒に、「わかってんのか」と言い、頬に平手打ちを繰り返し行った。	<input type="checkbox"/> 迷惑をかけられて周りが味わった苦しみをわからせるための指導だ。()	<input type="checkbox"/> 「時には暴力も必要」と、誤った認識を持たせてしまうのでは。()
目的の達成	生徒は反省と今後の行動を改める言葉を口にした。	<input type="checkbox"/> やっと素直さが見られた。必要な指導であった。()	<input type="checkbox"/> 素直にさせたのではない。力関係でねじ伏せたに過ぎない。()
正当化の行為	生徒の保護者に電話をした。生徒の問題行動と、それに対する厳しい指導を行ったことを告げると、保護者から御礼の言葉を受けた。	<input type="checkbox"/> 日頃保護者に感謝されている。自分の思いをきちんと伝えてわかってもらえれば問題にならないだろう。()	<input type="checkbox"/> 生徒が味わった痛みと恐怖はどれほどか。取り返しの付かないことをしてしまったことを自覚しなくては。()
発覚	保護者が管理職に連絡して発覚。事情聴取を受けた。(警察・学校・教育委員会)懲戒処分を受けることとなった。	最初は相手を思っただけの行動だったが、結果的に相手の心に深い傷を与えることになった。地道に作り上げてきた生徒や保護者との関係が壊れてしまった。	

セルフトーク 自分自身のモニタリングをしてみましょう。

「不祥事へ向かわせる心の声」が強いところや、「不祥事を思いとどませる心の声」が弱いところほどの段階でしたか。

(記入しましょう)

あなたが、不祥事に向かう段階を確実に防ぎ止められると思うのはどの段階ですか。それは何故ですか。

(記入しましょう)

あなたの特性を振り返ってみましょう。

◆参考◆ 事例分析から見えた事故者の特性の共通点

生徒をより良く変えたいと思っている／生徒の性格や課題をよく把握している／周りからは厳しくて言うことは言う先生だと思われる／
頼りになる存在になりたいと思っている／取り繕うことや素直ではない態度を許せないと感じる

(記入しましょう)

あなたが今、大切にしたいと思っていることは何ですか。

(記入しましょう)

防止策 不祥事を食い止めるためにできることを考えましょう。

あなたの「不祥事へ向かわせる心の声」を「不祥事を思いとどませる心の声」に切り替える方策は何ですか。

(記入しましょう) 考え方 :

(記入しましょう) 具体的な行動:

あなたが同僚だった場合にできることは何ですか。

(記入しましょう)

あなたの職場には、児童生徒に対して威圧的な態度で接することが良しとされている雰囲気がありますか。

なし・あり(ある場合には具体的な内容を記入しましょう)

このような事故を起こした場合に問われる①～④の責任について、それぞれ具体的に考えましょう。

(記入しましょう)①行政上の責任: ②刑事上の責任: ③民事上の責任: ④社会的な責任:

同じような事故を、あなたの職場で絶対に起こさない・起こさせないようにするために、みんなで取り組めることを考えましょう。

(記入しましょう)